

「会津における産業近代建築物の調査研究」 原山織物工場を事例として

a2200926 宮川 友紀

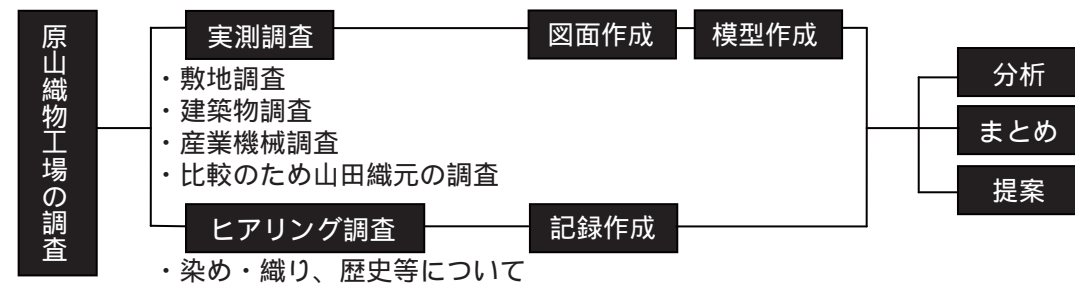
研究目的・背景

産業近代建築物は、これからますます少なくなっていくと考えられる。特に保存の対象とはならない産業建築物は使用が途絶えると同時に役割を終え、やがて取り壊されていく。このような建築物にも当時の様子や技術等を後世に伝えるべき要素を含んでおり、なんらかの形で記録する必要があると考えられる。

研究内容

会津の産業近代建築物の事例として原山織物工場を調査し、地域産業と建築物の関わりについて実測をすることでより詳細な調査・研究を行う。この調査を通して、地域産業における近代建築物の歴史の変遷や産業の変化に伴って建築物等がどのように変化してきたかなどを研究する。また、原山織物工場や会津木綿を多くの人に伝えていくための提案をする。

研究方法



調査結果

会津地域の産業近代建築物の文献調査

会津地域に残る産業近代建築物にはどのようなものがあるのか、文献調査にて事例を挙げた。

< 会津若松市 >

- ・白木屋漆器店
- ・小野寺漆器店
- ・満田屋
- ・會津番番館
- ・大町ガス燈
- ・渋川問屋
- ・末廣酒造嘉永蔵
- ・鈴木屋利兵衛
- ・宮泉銘醸
- ・旧若松庶民金庫
- ・旧郡山商業銀行若松支店
- ・鈴善漆器店
- ・旧会津実業信用組合
- ・神禧堂薬館 等

< 喜多方市 >

- ・大和川酒造
- ・喜多の華酒造
- ・吉の川酒造
- ・甲斐本家
- ・若喜商店煉瓦座敷蔵
- ・若菜家煉瓦蔵 等



宮泉銘醸



小野寺漆器店



渋川問屋



原山織物工場

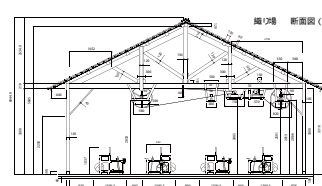
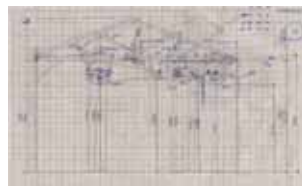
会津地域には多くの産業建築物が現存している。また、会津若松市の建物に関しては歴史的景観指定建造物に指定されており、保存や活用がなされている。事例とする原山織物工場はこれに指定されていない。

原山織物工場の調査

会津若松市日吉町にある原山織物工場で、夏季休業中および後期の期間に調査を行った。

a. 実測調査

実測は敷地、帳場、織り場、整経場、染め場の調査を行った。また、各機械の大きさや仕組みについての調査を行った。工場の配置は、中庭を囲んでそれぞれの建物が並んでいる。織り場、染め場が一間 1820mm であるのに対し、帳場と整経場は一間が 1910mm であるということがわかった。また、構造の違いや部材の古さの違いがあることがわかった。



織り場
左：スケッチ
中央：断面図
右：模型写真

b. ヒアリング調査

会津木綿をつくる工程について各作業担当の方にアンケート調査を行った。また、建物の歴史について前社長の方にお話を伺い調査を行った。

実測調査でわかった各建物のモジュールの違いや柱の大きさの違いについて、建物の歴史からその理由が明らかになった。明治 32 年創業の原山織物工場で、元々あったものは帳場、母屋、染め場であり、現在の母屋が帳場と糸巻きや機械を行う工場になっていた。そのため中の改装な

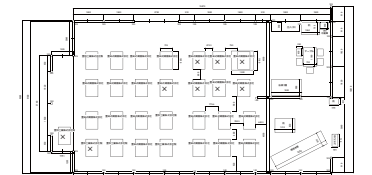
どは行っているが、現在の母屋と染め場は戦前からそのままの形で残っているものである。その後戦争の際に、織機が金属類回収令により終戦前に持っていかれてしまった。そのときの織機が豊田自動織機であり、また豊田自動織機の別ブランドである豊和工業株式会社製の織機とともに戦後に買なおし、現在でも使われている。そして現在の織り場は、陸軍病院が払い下げられたものであり、整経場や縫製の間は、戦後に民家を移築したものである。このように元の部材は移築してきたものであるものが多く、本来の工場としての部材ではない。また帳場、縫製の間、整経場、織り場の順に増築していったが、部材として一番新しいものは帳場であり、戦後の 1950 年頃に建てられたそうである。

これらヒアリング調査の結果から、建物が戦争時にそれぞれ様々なところから移築されてきたもののため、一間の寸法や柱の大きさに違いがあるということがわかった。

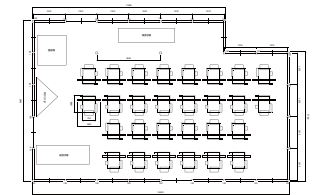
分析

山田織元との比較

会津には現役で豊田自動織機が使われている織物工場が 2 件あり、もう 1 件の山田織元との比較を行った。織機の台数は原山織物工場と山田織元で使われていないものを含めてともに 28 台であった。広さともに約 15m×10m であったが、原山織物工場は織機のほかに横巻き機と休憩所が含まれる。そして原山織物工場では整経の間は別の建物になっているが、山田織元では横巻き機スペースのほか、整経の間も織り場内にあった。原山織物工場と比べ、一つの場所にほとんどの作業を行う機械が置かれており、人がすれ違うスペースを確保できないくらい機械を配置していると感じた。



原山織物工場織り場平面図



山田織元織り場平面図

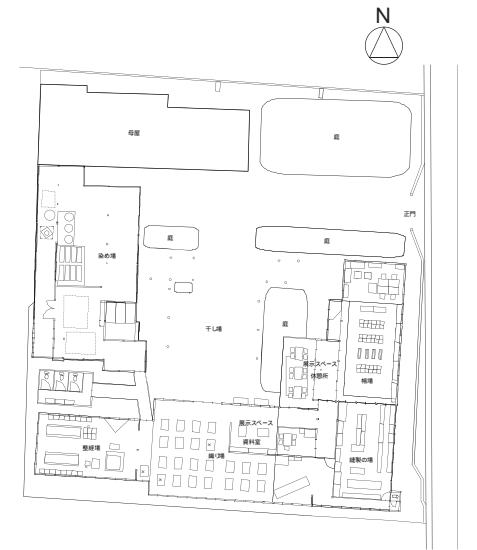
原山織物工場の構造について

元々ある建物と移築されてきた建物とが増築されつながっているため、一本に通った通路などはなく、また機械類と通路の幅が狭い箇所が多く存在した。元の建物が病院などのため構造が違うことで段差が生じている箇所が多く、移動がしにくいと感じた。

原山織物工場リファイン提案

実測調査にお邪魔させていただいていた期間中、訪問者が多いことに気づいた。帳場に会津木綿を見に来る人が多く、会津木綿の需要が高いと感じた。工場のほうに見学に来る人もいるため、原山織物工場では見学者のための施設整備などを必要にされていた。休憩所なども必要に迫られているが、実際整備が追いついていない。そのため見学がしやすい環境をつくり、会津木綿を製造の工程から紹介し、木綿を「魅せる」ことでより会津木綿を知ってもらいたいと考えた。

提案の内容として、トイレの整備・見学のための通路の整備・見学ルートの確立を行う。トイレの整備については来客用のものがなく、従業員の方々も気にされていたため新たに見学者のためのトイレの設計を提案する。見学のための通路の整備については、工場内を改装し循環できる通路の設計を行う。そうすることにより見学しにくい動線を改善する。見学ルートの確立については、会津木綿の製造工程の順に各建物を巡回する。見学ルートには、織り場の一部を使われていない織機の展示スペースにし、倉庫になっている部分を休憩スペースに改装し、それを組み込む。休憩スペースは倉庫部分だけでは狭いため、その部分から中庭にガラス張りの建物を増築し、そこも休憩スペースとなるようにする。ガラス張りにした理由は、休憩しながら中庭に一面に干された色とりどりの染色糸を眺めることができたらいいと考えたためである。そして、最後に帳場で会津木綿を買うことができるといった流れをつくりたい。



リファイン提案 配置図

- ・ボイラー室をトイレに改装する
- ・内側を巡回するように通路をつくる
- ・休憩スペースを増築する

考察・まとめ

会津地域には、多くの貴重な産業近代建築物があるということがわかった。しかしそのすべてが保存の対象となっているわけではなく、そういったものはそこに住まう人々が管理しなければならないといった現状がある。古い建物でも歴史の流れを伝える重要な建築物は、これから先、多くの人に知ってもらいたいと感じた。また原山織物工場では、訪れた人に会津木綿という地域特有のものも同時に知ってもらうための工夫をしていく必要があると考えた。

今回の研究で、古くから残る産業近代建築物の構造や機械の仕組みを学んだ。また同時にそこで働く地域の方々と交流を持つことで、歴史等の詳しい話を聞け、また実際の仕事の現状を肌で感じる事ができた。地域と関わり、地域をよく知ることによって歴史や伝統を伝えることができるのだと感じた。